

青い地球、白い雲

時がつくる。自然がつくる。

おいしい水は、谷川岳の六つの地層に濾過され湧きでる。遙かな時の流れに磨かれ、生まれた。まさに大自然の名作「名水 夫清水」の宣伝の言葉である。六甲の名水やら富士の湧き水など自然水、名水のブームである。水はたどって来る道筋を記憶し、深い味わいの水として湧きでて流れる。水の旬（むゆん）は夏ではなく秋から晩秋だという。梅雨のころから夏にかけて降り注いだ雨が、森の木々からフカフカの絨毯のような落葉をすり抜け、ミネラルを溶かしながら、ゆつくりと地下深く滲みこみ、甘く、まろやかな味わいの軟水として湧きだしてくる。

分け入つても分け入つても青い山」の句を初めに、放浪漂泊の旅にでた俳人、種田山頭火は俳句や日記のなかに各地のおいしい水を詠んでいる。伯耆大山の水はおいしいと語り、「へう へうとして水を味わふ」と詠んだ山頭火は、きき水の名人といわれている。生家の屋敷周りの水路にはいつも澄んだ水が流れ、山頭火の前の俳号を田螺公と称していた。田螺はタニシ、なにか水への深い憧憬と係りが感じられる。

落葉するこれから水がうまくなる」 水の味も身にしむ秋となり」

山頭火

水の旬を見事に味わっていた。

太陽系第三惑星の地球はこの豊かな水を湛えている唯一の惑星である。生まれ育ちや大きさが地球と似ている兄弟星の金星や火星の、あの荒寥とした無機質な姿とは、あまりにも対照的な生きた惑星のその根源に水の存在がある。気象衛星ひまわりから地球を眺めたら、無数の星を散りばめた漆黒の宇宙を背景に青い地球が浮かび、「フレ離れたところからみたバレ・ボール大の大きさに見える。その地球には豊かな水を湛える海があり、薄く白い雲がへばりついている。地球がもし距離にしてほんの五%ほど太陽に近かったら、水は失われ金星型惑星となり、遠ければ火星型の極寒の惑星となってしまう。その意味で絶妙な位置のある地球は水惑星として奇跡の星なのである。その源が奇妙な性質をもった水なのである。

水は比熱が大きく温まりにくく冷めにくく、物を溶かすやすく、きわめて安定で、粘性も小さくサラサラしているといった具合に優れた特別の液体である。人間の身体の水の六〇パーセントが水できている所以である。「冷たい水や高い圧力のもとで、熱い水」ができ、ふつうの水は水に浮くが、水に沈む水も可能となる。奇妙で複雑かつ寛大な性質をもった水なくては生きた地球は存在しえないのである。水惑星と呼んではみたが、その実、地球全体からみれば水はほんの〇.〇〇%しかない。星の半分ほど水を含んでいる海王星や冥王星のほうがはるかに水惑星だが、こちらは極寒の動きを止めた水の世界であり、「青い地球、白い雲で象

徴される液体の水の存在こそが地球そのものである。

水は蒸発して水蒸気となり、雲に姿を変え雨となつて再び海に戻る。この輪廻が地球を育み、多様な季節を演出してくれている。「平方キあたりの上空までの気柱に含まれている水は平均3ミ、年間の降る雨の量がおよそ1000ミ」なので、1年で30回ほど水が循環することになる。海から解き放された水が、入れかわつて海に戻るが平均で一日となる計算になる。夕方降った雨が、今年の七回目分の輪廻の雨かもしれないなんて思うとなにか神秘的で楽しくなる。降った雨は地下にしみこみ川に流れる。世界の川に流れている水の量は、地球上にある水の総量のわずか百万分の一しかない。この水循環のなかで、私たちは川に流れる水を自然からの恵として、ほんの少しだけ使わせて貰っているに過ぎない。日本列島に降る雨は平均で1880ミリ、約188億トンとなる。用水として利用しているのは上水道や工業用水で三二億トン、農業用水の88億トン（一九八八年）とを合わせても1割ほど。東京都の水道の使用量は1日約五〇〇万トンで東京ドームにして4杯分、人あたり1リットルの牛乳パック3本ほどが使われているが、人間が生きるのに必要な水の量は一日に一ないし二・五リットル。快適さのもとに、いかに多くの水が使われているかがわかる。春夏秋冬に梅雨と秋雨が加わる変化に富んだ季節に豊富な水をもつ日本人は、古来から上手に水

と付き合ってきた民族だといわれている。水との対峙する闘いのみならず、水に深く融け込んだ東洋的な思想が底に流れているように思える。循環する水は有限であり、川に流れるのも有限である。自然からの借りものである限りある水を、いかに上手く使って、美しさを保ちながらまた自然に帰せるかが問われている。八月一日は水の日。青い地球白い雲に思いをめぐらせ、宅急便で届いた大清水の名水を飄々（ひょうひょう）と味わいながら、永遠の命題に思いをはせてはいかがだろうか。